
旧校舎の噂

_瑠姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旧校舎の噂

【Nコード】

N0741BA

【作者名】

— 瑠姫

【あらすじ】

主人公、命が通う廻空学校の旧校舎の噂。
その噂を確かめるため肝試しをするが…

噂

私の名前は原 はら 命 みこと。

廻空中学校の3年生。

この学校廻空中学校にはある噂がある。

旧校舎の、噂。

大体何処にでもあるような噂だが、紹介する。

旧校舎 いじい つまり今は使っていない校舎。

しかしそれにはワケがあつて。

旧校舎のシャワー室で、自殺した生徒がいたらしい。

元々 いじい 虐められていた女子がいて

その子は何も言い返さないでただじっと耐えていた。

それが否となりいじめっ子たちはどうすればその子が泣き叫ぶか

考え

このシャワー室に閉じ込めて

出られないようにしたそうだ。

女の子は耐え切れなくなり

手首を切つて自殺。

学校側は虐めたものの、虐められたものの保護者に
冷静な対応と処分をして

事件は公けにならずにすんだ。
しかしそれ以来出るそうだと。

嘘だろうと教師たちは言ったが
彼女が自殺したシャワー室の血痕が今だに取れず
不気味なこともあるし生徒たちは騒ぐので

その校舎を立ち入り禁止にし
元々地震対策の工事をするため
新しい校舎を建てた。

そんな歴史がある旧校舎。

立ち入り禁止にしているが

一部の生徒が肝試しとして入っていた。

その生徒が見たものは詳しくは知らないが

まあ……出たらしく。

そこから学校全体に広まっていった

先輩から後輩に、そのまた後輩に……

受け継がれている。

私も実際美術部の先輩に教えてもらった。

そんなことを考えていた昼休み。

「命^{みこと}お、今日来るの？」

「へ？ どこに？」

「肝試しだよっ！！！」

ちょうど旧校舎のことを考えていたこともあり、
友達の瑠亜るあの発言にはちょっとだけ、ビビった。

そうだ、瑠亜の発言で思い出したが

今日はクラスみんなで肝試しをするのだ。

ウチのクラスは仲が良く

春は花見、夏は花火に肝試し、秋は芋煮、冬は雪合戦…など
季節の行事を全員で行ったり
カラオケやゲーセンに集まって遊ぶこともしばしばあった。

そして今日。

その噂の旧校舎で
肝試しを行う。

「なに。命みこと、ビビっちゃってんのお？」

瑠亜が顔を覗き込む。

「別に！！！怖くないし！！」

おおげさに声をあげると

瑠亜はフツツと意味ありげに微笑んだ。

「あ、授業始まるう♪」

そういつて軽い足取りで席に戻る瑠亜。

その背中を見送り

数学の用意を始めた。

そして夜。

「命^{みこと}お、大丈夫う？」

放課後家に真っ直ぐ帰り

夕飯を食べた後

制服から私服に着替える。

色々めんどくさくて

一枚ワンピースをさらっと着て

靴は適当に引っ張り出した踵の高いサンダルを履いた。

校庭に集合。

しかし私は緊張と真っ暗な旧校舎の恐怖で

笑顔は引きつり手足はちょっと震えていた。

それを心配した瑠亜がみんなが集まるまでずっと一緒にいてくれた。

噂（後書き）

短編にまとまりきれなくて連載にしましたが、3話ほどで終わります。

始まり

「みんな集まったか？出発するぞ」

学級委員の杉本くんの合図とともに

クラスのみんなは旧校舎に入り始めた。

古ぼけた玄関。

「命、ほんとに平気？杉本に言って外で待ってようか？」

「大丈夫：はは」

ほんとは大丈夫でもなかった。

恐怖に震える手足は夏だというのに冷え切っていた。

でも、1人で旧校舎の外で待ってたほうが何かありそうだ。

一步一步歩きたび軋きしむ床を踏みながら瑠亜るあとゆっくり歩いていた。

「おい、お前らで最後だぞ、急げ！！」

杉本くんが私たち2人に声をかけた。

「わかったああ!! 先行っててえ!!」

廊下の端から叫んでいる杉本くに

まだ玄関先にいる私たちは叫んだ。

「わかったー」

そう返事が返ってきて

廊下から2人以外人はいなくなった。

沈黙。

脚はすくんで動かなくなっていた。

「命、ウチ杉本に言ってくるよ! 待ってて」

そういつて走り出す瑠亜。

「ちょっ…待っ…!!」

そう言う間もなく瑠亜は廊下を走り抜けていく。

私も走ろうとしたが

踵の高いサンダルを履いてきたのが間違いだった。

「う…うう」

自らが出した声にさえビビってしまう。

玄関には昔使われていたであろう下駄箱が並んでいる。
古ぼけた傘置きは錆びていて曲がっている。

誰かが忘れていったのか上靴が一足、下駄箱に残っていた。

ひゅう

外からは風の音。
真っ暗な玄関。

しかも、一人きり……

恐怖に耐えられなくなった私は瑠亜が走っていった廊下に脚を進めた。

バサツツ!!

「ひ…っツ!!!!?」

物音が後ろからして思わず漏れる小さな悲鳴。
そっと後ろを振り返ると

一冊のノート。

下駄箱のわきに置いてあるところを見ると
入り込んできた風によって

下駄箱の上とかからノートが落ちたんだろう。

そつとそのノートを拾い上げる。

「…なんだ」

恐る恐る覗いたものの

白紙。白紙。

ペラペラとめくっていった

ピタリ、その手を止めた。

『シャワー室の鏡は覗くな』

端に書いてあるたった一言の言葉。

ゾワツと鳥肌が一瞬にしてたつのがわかった。

どういう意味があるのかはわからない。

ただ、悪戯^{いたずら}で書いただけかもしれない。

それでも私は何か重要な秘密があるような気がしてならなかった。

それに一人で真っ暗な旧校舎に立ち尽くす私にとって

全て恐ろしいことに感じてしまうのは仕方のないことだった。

ノートを片手に持ち

ポケットに手をつ突っ込む。

……ない。

携帯がない!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

ああああああああああ

しまったああああ！！

一人で勝手に途方にくれた。

しかしそうも言ってられず。

できるだけ瑠亜たちがいるほうに行こうと

私は廊下の突き当たりまで歩き

階段を上り始めた。

名を呼ぶ声は

「命」
みこと

ヒヤリと冷たい風。

歩くたび軋きしむ廊下。

ペタペタと一步一步鳴る自分の足音と風の音以外何もない。

そこに自分の名前を呼ぶ声がした。

一瞬で身体は固まり

ギギギッと音がするかのような重さの首を後ろへ振向かせる。

そこには真っ暗な廊下と遠くに見える玄関があるだけだった。

あんなに遠くに玄関があるってことはけっこう進んだんだ。

名前なんて呼ばれてないじゃん、馬鹿じゃないの。

自分の脳内で自分に語りかけてみた。

ふん、それこそ馬鹿らしいっ

ツツコミを入れホッと意味のわからないため息をついた。

時間はどれだけ過ぎたのだろう。

携帯を忘れるなんて致命的だ。

でも何十分もこの1階の廊下を進むのに費^つやしているのは確かだ。

ゆっくりと一步一步確実に、できるだけ足音をたてないように

慎重に慎重を重ね20〜30分は玄関からココまでかかっただろう。

距離にして…50メートルくらい？

遅ッ!!

我ながら自分の歩くスピードの遅さにビックリした。

50メートルのタイム8秒なのに

20〜30分!!?

あり得ない…

そう思いながらまた前に足を戻した。

「命お^{みこと}」

……なんでこんな冷静なんだろう。

現状が把握できるよ…

名前、確かに呼ばれてるよ。

しかもさ、コレ、後ろじゃなくて前から声してるよ。

うわうわうわ、前って…

前って…

前って…

体育場じゃないっすか――――！！！！？

私はさすがにパニックになりかけた。

けど冷静さを取り戻した。

そうだよ、肝試しに来たんだから

みんな色々なところ回ってるんでしょ？

それで、体育場にも誰かがいて

私の名前を呼んでるんだ。

我ながら見事な推理！！

っっってそんなワケねーだろうがよ！！！！

体育場には誰も入ってなかった！！

みんな階段をのぼって上の階に行ってたし。

恐怖に冷えて固まった手で抱きしめていたノートに目を移す。

『シャワー室の鏡は覗くな』

コレと関係してる…？

好奇心と恐怖に負けて

私は足を体育場に向けた。

旧・体育場

「誰かいますかあ？」

広々とした体育場に響く私の声。
その声に返答はなかった。

当然といえば当然だが。

入り口から土足のまま入る。

真っ暗で視界はあまりよくないが窓から入る月明かりである程度は見えた。

ぶらさげられてるバスケットゴール。緑色のネット。

一番前の中央にあるのはステージ。

ほとんどの造りは今の体育館と一緒だ。

ただ違うのは

入り口から入ってすぐ隣にある

シャワー室。

男子トイレ女子トイレに並び一番手前にある。

私はゴクリと唾を飲み込み

シャワー室の扉に手をかけた。

いじめ

ビキリ

殴られている音。

蹴られている音。

笑われている音。

そして血が滴る音……

「ヒッ!!!!!!!!!!!!!!」

慌ててシャワー室の扉から手を離した。

静電気のような気軽さとすばやさで私の脳内にいじめの記憶が流れてきた。

シャワー室。

触れてはいけない過去なのだろうか

しかし乗りかかった船ならぬ触れかかった船!!

ココはドンと構えていくしか：

扉に手をつけた。

次はなにも起こらなかった。

「ふうっ…」

がぼっ

一息ついた瞬間だった。

水…水！！？

トイレにいたんじゃないの！！？

コレ…プール？

『なに浮いてきてんだよう溺れろよ』

頭に流れるエコーがかかった声。

「いや…やめて、死ぬよ…」

「殺そうとしてるんじゃない。馬鹿？」

エコーはとれて生々しい声が響く。

映像も流れ込んできた。

その瞬間突き刺すようなキンツとした痛みに頭を抱えた。

ドゴツ！バシツ！！

「…ッ」

「オラオラア、泣けや！！」

「嫌…絶対泣かない…っ」

「ああん！？」

たたく力も殴る力も蹴る力も強くなってゆく。

痛いよ止めて…

声は聞こえないのに流れ込んできたその声。

そしてまた頭痛。

次はこのシャワー室にいた。

「何するの!!? やめてよっ…」

「お前がいつまでたってもなかねえから閉じ込めるのよーん」

ガチャガチャとカギをするいじめっ子。

「ッ出して!! 出してよ!!」

「一生ココに入ってな!!!!」

最後に一発ドアを蹴りつけいじめっ子たちは去っていった。

「う…うう…!!」

いじめられた子の泣き声がシャワー室に響いた。

「いいわよ…、死んでやる!!!!!!!!!!!!!!」

ポケットに入ってたらしいカッターナイフを取り出すあのコ。

「でも、私死ぬ前に友達がほしい…」

ボソリと呟く。

かわいそうに…

そのとき。

[illegible]

「キャアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「！」

「みこと命…!!!?」

やめて。名前を呼ばないで。

シャワー室から聞こえた名前を呼ぶ声はいじめられたあのこの声だったんだ。

私を友達にしたかったんだ。

ごめんね。もう…もうやめて…

「原さん!!!?」

「命ーーーーッッ」

「原ああああ!!!!」

パチッとめをあけてそこにいたのはあのこではなかった。

瑠亜と杉本くん…あれ、みんないるよ。

「やっとめえあけた…命おおッ」

「瑠亜…？」

瑠亜が抱きついてくる。

「もう夜中だぞ、原…」

杉本君が心配そうな顔で覗き込んだ。

「どうなってんの…？」

「私が玄関に戻ってきたら命いなくて…っ旧体育場の前でぶっ倒れてたの…!!」

ひくひくと涙をためながら説明してくれる瑠亜。

旧体育場の前…？

中に入ったはずなのに：

「2時間も眠りっぱなしだったわけだなっ」

杉本君の一言にクラスのみんな、穏やかな顔になった。

その光景を見てなぜか涙が溢れてくる。

「あのコは：友達いないままア：死んじゃっ：っ」

しゃっくりをあげながら言うが事情が分かる人などいるはずもなく

泣き止んだあとあの虐めの話をした。

その後先生も付き添いに来て成仏してほしいとの願いで

お払いをしてもらった。

数年後

数年後。今、私は社会人になっている。

あのときのクラスみんなで今集まっているところだ。

あの旧校舎が壊されるから。

あのコ、成仏…してほしいよ。

できたのかな？

シャワー室での出来事は忘れてないよ。

ちゃんと、覚えてる。

これまでもこれからも。忘れない。

頬をつたう涙。

瑠亜も泣いていた。

ガシャーンと大きな音を立ててバリバリと壊されてゆく旧校舎。

その工事の手が旧体育場にさしかかったあたりで。

《アリガトウ》

脳内に響いたあの時の声。

私は微笑み瑠亜と杉本くんとみんなで手を繋いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0741ba/>

旧校舎の噂

2012年1月11日21時52分発行